

カセサート大学 派遣

亀谷 牧子（5年）

カセサート大学派遣プログラムは水生動物1週間、大動物4週間、エキゾチックアニマル1週間の合計6週間という IVEP の交換留学プログラムの中でも最も長い期間に渡るプログラムであり、応募する際には迷いや不安もあった。しかし、プログラム中は様々な新しい経験をすることができ本当に楽しく、プログラムに参加することができて良かったと思っている。それぞれのユニットで実際に経験したことや学んだことについて以下にまとめる。

1. Aquatic Animal Unit

Aquatic Animal Unit は1週間という短い期間であったが、まず座学でエビや魚の飼養管理方法などを学んだうえで養殖場の見学に行き、水質などの検査をして問題点を考えるところまで行うことができ、非常に高い密度で学ぶことができたと思う。日本では魚やエビの病気について学んだのみだったので、最初に水生動物の養殖の方式やそれぞれの生育段階と最適な環境についてなど基本的なところから学べたのは良かった。養殖場の見学はタイの学生と一緒に行くことができ、一緒に検査をしたり最適な管理の方法について話し合ったりしたのも良い経験になったと思う。

2. Large Animal Unit

Large Animal Unit は反芻動物3週間、馬1週間合計4週間あり、様々な症例にふれることができ、将来大動物の獣医師になりたいと考えている私にとってはとても勉強になり、将来の働き方についてより深く考えることができた。

反芻動物のユニットでは主に農家の往診へ随行し、様々な症例の治療を見学したり簡単な検査や治療を実施したりすることができた。口蹄疫の症例は見られなかったものの、口蹄疫発生エリアの農場へ行った際には一旦病院へ戻り車や長靴を消毒してか



子山羊のTPR測定の様子

ら次の農場へ出発するなどの対策がなされており、口蹄疫の発生による生産現場への影響の大きさを肌で感じる事ができた。また、ランピースキン病など日本ではみることができない感染症の牛をみる事ができ、貴重な経験となった。乳房炎や子宮炎の牛も多くいて、タイでも繁殖関連の疾患は大きな問題となっていることを実感することができた。私は牛の分娩についての研究をしているため適切な分娩管理の重要性を再確認でき、研究のモチベーションを向上させることができたと思う。診療の際には先生からどのような治療を行うのが良いと思うか聞かれることもあり、自ら考えながら学ぶことができた。

往診のほかにも牛や山羊の農場の見学へ行き、繁殖や飼養管理の方法について学べたことも良い経験となった。この見学を通して私はより農場の経営や管理方法について興味を持つことができたため、日本に帰ってから実習に行くなどしてさらに学びたいと考えている。山羊については日本ではなかなか学ぶ機会がないので、人工授精方法や手術について実際に見て学ぶことができて良かったと思う。

馬のユニットでは乗馬クラブや蹄病の馬の手術な

どを見学することができた。馬の運動のさせ方や全身麻酔下での削蹄はこれまでみたことがなかったのので勉強になった。病院に入院中の馬の中には義足の馬もいて、安楽死について改めて考えるきっかけにもなった。これまで足を切断しなければならぬほど怪我を負った馬を安楽死することについて特に疑問を持ったことはなかったが、義足の馬は案外普通そうに歩いていて驚いた。安楽死に対する考え方や治療方針は文化的・宗教的背景による影響も受けており、国や人によって全然異なるものであるということを感じることができた。



猛禽類へ注射している様子

3. Exotic Animal Unit

Exotic Animal Unit では1日野生動物について学び、4日間は Exotic Animal の病院で様々な動物の症例をみる事ができた。野生動物については猛禽類の保護施設でハンドリングや注射の方法について実際にやらせてもらいながら学ぶことができた。ゾウの症例がおらずゾウについて学ぶことができなかったのは残念だが、代わりに麻酔銃や吹き矢の取り扱い方を教えてもらい、的を使って練習できたのはおもしろかった。

病院ではカメラやウサギ、ヘビ、オウムなどこれまであまり学んだことのない動物の病気や治療法について学ぶことができ、新鮮だった。それぞれの動物で特有の疾病や検査方法があるのが興味深かったと思った。

このプログラムでは様々な動物に触れ、飼養管理方法から疾病の治療法まで幅広く学ぶことができた。さらに検査や治療なども実際に経験させてもらったことで実際の診療で必要となる技術も向上させることができたと思う。また、自分で考えたり調べたりしたことをレポートにまとめて提出したり、プレゼンを行ったりすることによって主体的に学ぶ方法も身につけられたように感じた。

プログラムの日程上カセサート大学の学生と一緒に学ぶことができたのは Aquatic Animal Unit のみだったが、一緒にご飯に行ったり、バドミントンをしたりして交流できたのは良かった。学生だけではなくカセサート大学の先生方や食堂のスタッフの方までタイの人たちはみんな親切で、効率や損得にとらわれず、毎日楽しく生きている感じがして素敵だと思った。

私はこのプログラムを通じて普段の自分とは全く違う環境へ身を置くことで、自分を客観視することができ、足りない部分やもっと学びたいことに気づくことができた。このような貴重な機会を与えてくださった先生方や一緒に行ってくれたメンバー、タイの学生、仕事を引き受けてくださった教室の先輩方への感謝を忘れずに、ここで学んだことや感じたことをこれからの学校生活や自分の将来に生かしていきたいと思う。



エラワン国立公園にて

カセサート大学 派遣

河合 星来（5年）

私は10月8日から11月20日まで行われたタイのカセサート大学への派遣プログラムに参加した。今回の報告書ではタイで学んだことおよび生活について書いていきたい。

まず、今回のプログラムでは Aquatic animal と Equine が1週間ずつ、Large animal が3週間、Exotic animal & Wildlife が1週間ありそれぞれの動物の診療について学んだ。Aquatic animal では養殖方法、水質管理について学んだ。日本では魚病学の授業で疾病についてのみ学んだため、初めて知ることが多く楽しかった。Aquatic animal unit では金魚とエビの養殖場に行ったが、そこではその農場の養殖方法について聞いたり、水質検査をしたり、採血をすることができた。エビから採血できるということは初耳だったため、とても面白かった。個人的な印象としては、Aquatic animal unit では特に水質管理に重きを置いていて、水中のアンモニアや pH、各イオンなどが変化するとどのようなことが起こるかということを詳しく説明してくださり、疾病の発生と予防には水質管理が重要だということがよく理解できた。



直腸検査の様子

Large animal unit では Nong Pho の病院で1週間、Kamphaeng Saen の病院で2週間、牛や羊の診療について学んだ。どちらの病院も往診に同行し、農場での診療について学ぶ形式だった。

この Large animal unit では日本では見ることがない破傷風やランピースキン病の牛を見ることができた。日本で発生していない疾病を見ることは今回の留学の

目的の一つであったため、目的を達成できて嬉しかった。また、Large animal unit では注射や採血、直腸検査など色々なことを体験させてもらえることが多かった。特に直腸検査は日本で回数練習したことはあるが、卵巣に触れたことがなかったので、初めて卵巣に触れ、エコーで描出できたのはとても嬉しかった。さらにカンベンセンオリジナルの Kamphaeng Saen Beef の農場にも見学に行き、

Kamphaeng Saen Beef の歴史や飼養管理について学んだ。その農場では放牧を主に行っていて、寄生虫対策のために数日ごとにエリアを変えることや、同じエリアは1か月以上経過してから使用することを行っていて、勉強になった。また、糞尿から堆肥を作って販売も行っており、堆肥を作るエネルギーも糞尿からできているとのことだったので、経営の仕方に関心を持った。このように管理が徹底されている農家がある一方で、多くの農家は各個体の記録があまりされておらず、



羊から採血しているところ

どのような経歴がある牛なのか、農家自身がわかっていないことが多かった。さらに、タイは日本と比べると小規模の農家が多く、農場内に多数のイヌやネコがいて、牛舎内を出入りしていた。また人工授精ではなく、自然交配を行っている農家もいて日本との違いを感じた。タイの肉牛はタイ原産の牛と、アメリカやフランスなど他の地域の牛を交配した種を育てていて、タイの肉牛は耳が大きくて個人的にはホルスタインよりも可愛かった。ただ、タイの牛は攻撃的な個体も多くいたので、普段の牛への接し方は大事だと感じた。Large animal unit では牛だけでなく、羊や山羊の症例にも立ち会うことができた。特に印象に残っていることは副乳頭の切除と眼瞼内反症の治療である。副乳頭の切除はタイで行われる山羊の大会における必須事項と聞き、タイならではの手術で面白さを感じた。眼瞼内反症は授業では学んだが、実際に見たことはない症例なので、手術の手法について見ることでよかったと思う。



タイの牛

Exotic & Wildlife unit では、動物病院に来るウサギやヘビ、カメなどの症例に立ち会い、治療を見たり、大学構内の診療施設で野生の猛禽類の診療を見たり、オウムの農場を訪れたりした。どの動物も診療を見るのは初めてだったのでとても興味深かったが、特に猛禽類の診療が個人的には最も印象に残った。猛禽類の保定の仕方から、身体検査の項目、BCS の測定の仕方、採血の部位など今まで知らなかったことを学ぶことができた。特に保定の仕方は、診察をする上で大事なものであるため、安全な保定の仕方を学ぶことができてよかったと思う。

6週間に及ぶタイでの暮らしでは、様々なタイ料

理を食べることができた。タイ料理は辛い物も多いが、総じてとても美味しかった。私が最も好きなタイ料理はタイ北部チェンマイ発祥のカオソーイである。カオソーイはカレーラーメンのようなもので、派遣期間中何度も食べた料理の一つである。また、派遣期間中は毎週末バンコクやチェンマイ、カンチャナブリなど色々な地域に旅行に行くことができた。このように楽しいことが多かったタイでの生活だが、一つだけ大変なことがあった。それは虫がとても多いことである。私たちが住んでいた寮にはヤスデや蚊などの虫が大量にいて、普段虫に触れない私からしたら本当に大変だった。しかし、タイで購入した虫よけスプレーのおかげで乗り切ることができたので、虫嫌いでも案外何とかなるのだなと思った。



カオソーイ

今回のプログラムを通じて、私がタイに対して受けた印象としては、タイの人達は皆優しくフレンドリーということである。カセサート大学の学生や先生たちは、私がわからないことがあればわかるまで丁寧に説明してくれたり、おすすめのお店や観光名所を教えてくれたり、ご飯に連れて行ってくれたり、彼らには本当にお世話になった。またタイの人たちは自分自身のことを大事にしている、例えば診療の合間にカフェで休憩するなど、自分が好きなように働いている印象があり、このような働き方ができる環境を少し羨ましく思った。他にもタイの学生たちは獣医学生の生活をとても楽しんでいるように見えたので、私もこのような心持を持って、残り約一年間楽しみながら研究生活を頑張っていきたいと思うようになった。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださった、先生方、両親、また滞在期間を楽しみ物にしてくれた同期たち、タイの学生や先生には感謝してもきれない。今回の貴重な経験を将来に活かし、努力し続けていきたいと思う。

カセサート大学 派遣

中川 晋太郎（5年）

今回のカセサート大学派遣において私たちは主にカンベンセンキャンパスに滞在し、6週間かけて水棲動物、大動物、馬、エキゾチックアニマルについて学んだ。

1. Aquatic unit

1週目は水棲動物について講義を受け、エビと金魚の養殖場へ見学に行った。講義ではタイにおける水産業や水棲生物の養殖の形態、養殖の管理について学んだ。養殖の管理では水質管理が特に重要であり、アンモニア濃度や溶存酸素量、pHなど種々の指標を管理することで養殖場における疾病を予防しているということを知り、養殖場では実際に水質検査を行った。また、エビの養殖場ではエビからの採血方法について教わり、実際に体験させてもらった。日本では水棲動物について学ぶ機会が少ない上、実際にこのような経験をするのはないので、非常に貴重な経験となった。

2. Large animal unit

2週目と4、5週目は大動物のユニットで牛や羊、山羊の診療について学んだ。
2週目はノンボーという、キャンパスから離れた場所にある大学の動物診療所に1週間滞在した。基本的には先生方の往診に同行して身体検査や採血、薬の投与等を行い、症例について学んだ。ノンボーでは日本では見ることのないランブースキン病の症例や過去に口蹄疫に罹った症例を見ることができた。また、身体検査や採血などを数多く経験でき、大動物に対する実技能力を向上することができた。ノンボーで見た症例の中で、子宮捻転に対する母体回転法という治療法が特に印象に残っている。授業で学んだ治療法ではあるがこの治療法はとてもダイナミックな治療法であり、大人5人がかりで牛

を押さえつけて回転させる様子は衝撃的であった。
4、5週目はカンベンセンキャンパスで大動物の往診に同行した。ここではヤギやヒツジといった小反芻獣の診療が多かった。何十匹ものヤギの妊娠鑑定をしたり、1日で1人約20頭ものヒツジから採血をしたりと、沢山の経験を積ませてもらった。大学でヤギやヒツジを見ることは少ないため、これらの動物の飼育や治療の方法は非常に興味深かった。



休憩時間にカフェにて

3. Equine unit

3週目は馬の診療について学んだ。
初日はバンコク近郊にある乗馬クラブへ行き、跛行診断や飼育環境について学んだ。跛行診断はとても難しく、どの足が跛行しているのか中々見分けられなかった。
2日目以降はカンベンセンキャンパスの馬診療所で、来院した馬の治療を見学した。来院する馬は蹄疾患のものが多く、その原因として蹄を削りすぎていることが多いということには驚いた。日本で飼育されている馬は競馬や乗馬用が多く、削蹄師が蹄を管理しているが、タイでは個人的に所有している馬が多く、オーナーが自分で削蹄しているため蹄疾患が起きやすいとのことだった。私たちがいた1週間では蹄疾患の症例が最も多く、全身麻酔下での蹄の手術も見学することができた。

4. Exotic unit

6週目は大学内のエキゾチック専門の診療所でエキゾチックアニマルや野生動物の診療を学んだ。診療所ではインコ・オウム類やカメ、ヘビ、ウサギなどの診療を行っており、野生のカメや野鳥といった保護された野生動物の治療も行っていた。日本と比べると中・大型のインコ・オウム類が多い印象を受け、コンゴウインコのように日本では動物園でしか見ないような動物も一般に飼育されていることに驚いた。また、スローロリスなど違法に飼育されている動物もいるという話を聞き、日本でもタイでも同じような問題はあるのだと思った。



オオバタンからウイルス検査用のサンプルを採取

エキゾチックアニマルの治療を見るのは今回が初めてだったが、それぞれの動物種によって解剖学的構造はもちろん採血や保定方法なども異なっており、学ぶこと全てが新しくとても刺激的だった。特にカメの臓器の位置は哺乳類とは大きく異なっており、最初にレントゲン画像を見た時はどこが何の臓器なのかわからず混乱した。

大学内の猛禽類保護施設と象の診療所で野生動物について学んだ日もあった。猛禽類保護施設では保護された野生猛禽類の治療を行っており、断翼されたフクロウや趾瘤症のタカなどの治療について教わった。この日は象の診療所に象がいなかったため、代わりに吹き矢について学んだ。吹き矢の構造は日本で教わったものと異なっていたが、使用方法や矢筒は日本と同じであった。吹き矢、CO2 銃、麻酔銃の使い方を練習してのスコアを学生間で競い合ったのはとても楽しかった。

5. タイでの生活

タイの学生達はとてもフレンドリーで、放課後に

はご飯や飲み方に連れて行ってくれたり、一緒にバドミントンをして遊んだりした。食事は基本的に屋台やセブンイレブンで購入したが、ご飯がとても安く美味しいものばかりだった。セブンイレブンは日本よりもサービスが充実しており、その場で焼いてくれるホットサンドは特に絶品だった。ただ、油断をすると物凄く辛い食べ物に当たってしまうため注意が必要である。私は辛い食べ物によって2回ほどお腹を壊し、とても苦しんだ。

平日は毎日授業だったが、週末には旅行に出かけ、バンコクやパタヤ、プーケットなどを観光し、寺院を見たりダイビングをしたりと充実した週末を過ごした。

6. まとめ

タイで過ごした6週間の中で、日本ではできない経験を沢山することができた。また、タイの人々の心の温かさを強く感じた。タイの人々はとても親切で、動物に対しても深い愛情をもって接していた。このようなタイの人々の人や生き物に対する姿勢を真似していきたいと感じた。

また、派遣を通して自分の英語の未熟さを痛感した。タイの学生は普段から英語で授業を受けており、日常会話から専門用語まで使いこなして授業中は活発に議論をしていた。将来のためにも英語をしっかりと勉強し、不自由なく英語でコミュニケーションを取れるようになりたいと強く感じた。

最後に、この派遣プログラムに関わって下さった先生方や IVEP オフィスの皆様、一緒にタイで楽しい時間を過ごしてくれた同期やタイの学生達に深く感謝申し上げます。



バンコクの寺院にて

カセサート大学 派遣

西村 穂乃香（5年）

2022年度にIVEPIにより行われたカセサート大学派遣は、10/8（土）から11/20（日）までの6週間であった。1週目が Aquatic Unit、2週目が Nong Pho での Large Animal Unit、3週目が Equine Unit、4-5週目が Kamphaeng Saen での Large Animal Unit、6週目が Exotic Unit であった。

1. Aquatic Unit

月火は魚の、水木はエビの実習であった。どちらも1日目は講義、2日目は養殖場見学であった。金曜午前には魚についてのプレゼンを行った。全体を通して魚とエビの管理方法や疾病を教わった。水質管理や養殖方法、エビの疾病について全く知らなかったため、学ぶこと全てが新鮮であった。魚の実習では金魚の農場に行き、エビの実習では屋外にある農場に行った。そこではバナナの木を粉砕して水質維持を行っていることが印象的であった。養殖場ではタイ人学生と共に水質検査をし、結果についてディスカッションをした。プレゼンでは金魚の養殖場について学んだことを発表した。



金魚の養殖場 タイ学生と

2. Large Animal Unit

朝に大学に来て、一日往診随行を行い、早く帰ってくれば大学で診療の見学を行った。乳房炎や周産期疾病、蹄病など基本の疾病の他、ランピースキン病や破傷風、目の内反症、



山羊80頭の採血

成長したフリーマージン牛など珍しい症例も見ることができた。大学は臨床に重点を置いているため、患畜への採血や注射を多く練習させてもらった。特に5人で80頭の山羊の採血をしたのが印象的である。また、カンベンセンから出発する往診では、往診する獣医の他にもう一人、説明用に教員が来て下さったため、一症例ごとにも丁寧な教えて頂けた。毎日一つは見たことがない疾病があるため、とても刺激的であった。最終日は3週間あった内の症

例から2つ選んで、5人で分担してプレゼンテーションをした。

3. Equine Unit

1日目は乗馬クラブに見学に行き、跛行の診断を見学した。

2日目はデモンストレーション用の農場で馬の採血、注射、胃のガス抜き等の練習をさせてもらった。馬の臨床の練習をこ

会中は中々ないため、とても貴重な機会となった。3、4日目は重度の蹄病の外科手術を見学した。用いる道具や薬が日本とは違ったため面白かった。また、この中でタイの馬事情や動物に対する考え方の違いを教えて頂いた。例えば、日本なら走れなくなった馬は淘汰されるが、タイでは義足をつけてずっと入院している馬がいるなど、価値観の違いを感じ興味深かった。

4. Exotic Unit

小動物病院のエキゾチック診療科に一日滞在し、症例を見学させてもらうというものだった。午前中は治療の練習をさせてもらえることが多かった。ウサギの鼻涙管障害の診察や、カメの採血、蛇のハンドリング、オウムなど鳥類のウイルス検査を練習させてもらった。また、1日は野生動物の日で、午前中は猛禽類の病院に行き、ハンドリングや身体検査、ウイルス検査用のスワブ採材、採血等を練習した。午後は麻酔銃の練習をした。麻酔銃の種類によって正確さや距離が全く異なるのを実際に体感でき、とても面白かった。運が良ければゾウの治療をみることもできたいが、既に退院してしまっていた。また1日はオウムの農場に行き、ワシントン条約に登録されているような珍しい種類のオウムやコンゴウインコを見せてもらい、種類の鑑別について教えてもらった。

5. タイでの生活、学生との交流

私達が関わったのは、1-3月に日本に来るタイ人学生達と、Aquatic Unit で一緒だった学生2クラス



エビのクラスで同じだったタイ学生とバトミントン

であった。みんなとても親切で、学内を案内してくれたり、マーケットに連れて行ってくれたり、一緒にご飯を食べたりした。嫌な顔一つせずわざわざ車で寮まで迎えに来てくれ、行った先でタイや日本について、獣医について、生活についてなど他愛もないことから重要なことまで、様々なことをお互いに話した。

タイでの生活は日本とは色んな点が異なった。急な豪雨や凄まじい湿度、強い日差し等気候は勿論違った。食生活は基本外食であり、ナイトマーケットや食堂、大学近くのレストランで食べた。どこまでも安くて美味しかった。あとは、たまに死ぬほど辛い物があるので腹痛になった。

6. 全体を通して

勉強について、どの先生も丁寧に分かりやすい英語で説明してくださった。私に分からなそうにしていると、言い方を変えて分かるまで説明してくれた。また、質問に対してはこちらの意図が伝わるまで辛抱強く聞いてくれ、それにとても詳しく返してくれた。

先生方の知識の豊富さに加え、私がとても驚いたのはタイ人学生のレベルの高さである。みんな英語が堪能で知識が豊富なのは勿論のことだが、ほとんどの学生が将来について明確な理由を持って決めているのが印象的であった。学生になぜその獣医になるのかを聞くと、とても多くの理由が返ってくる。これは一重にカセサート大学の教育の高さだけでなく、授業に対する意欲や授業自体の面白さを表しており、それに伴って優秀な学生が育つのだなと感じた。

今回、獣医学についてよく学んだのは勿論である。加えて、タイでの勉強や学生に刺激されたことは、自分が将来どんな獣医師になりたいか、またその先に何をしたいかを深く考えるきっかけになった。このプログラムで得られたことは忘れられない経験になり、将来国際的に活動する際、また国内で国際的な視野を持つ点においてとても役立つと言えるだろう。

カセサート大学 派遣

福山 容一（5年）

10/8から11/20までの6週間、タイのカセサート大学で獣医学を学びました。

1週目は、前半では魚、後半ではエビの養殖について学びました。魚の養殖では、特に水質検査について学びました。日本の魚病学では、魚の伝染病については深く学ぶものの、飼育管理や水質維持など養殖管理に関してはほとんど学びません。そのため、講義やディスカッションで、この部分について深く掘り下げていたのは印象的でした。また、産業動物としての魚の養殖であることから、実際のファームで行える検査として経済性を重視していました。それぞれのファームによっても必要な検査は異なることから、どんな検査が必要なのか考える機会もあり、実際の現場で役立つような講義や実習になっていました。最終日には、水質検査の意義や検査法、基準値、改善方法など、講義や実習を通して学んだことをプレゼンテーションで発表しました。また、キャンパス近辺の養殖場でコイの大量死が発生したことから、原因究明のための実習が組まれていました。水質検査や剖検、細菌培養やウイルス検査が行われ、大量死の原因を同定しました。このプロセスに関してもカセサート大学の学生がすべてをプレゼンテーションにまとめて発表していました。

2週目は Nong Pho という離れた町での実習でした。この周辺には牧場がたくさんあり、毎日少人数のグループに分かれて車で往診に向かいました。往診では、乳房炎やケトosis、ルーメンアシドーシス、肺炎、胎盤停滞など多くの症例を診ることができました。往診が終わったあとの課題として、毎日1症例のケースレポートをまとめて提出することになっていましたが、ケースレポートをまとめる過程で、実際に見たことと教科書的知識を比較して整理することができ、疾患についての理解が深まりました。ケースレポートでは診断、治療選択に至るま

での思考プロセス、臨床推論が重視されており、現場で得られた情報から診断を導くための良い訓練になっていると感じました。牛の往診では、診断に使う特別な装置はほとんどなく、問診や身体検査によって診断していました。ケースレポートは獣医師の先生にチェックしてもらったのですが、自分が拾えなかった検査所見や他に考えるべき鑑別を指摘され、もっと観察すべきこと、考えなければいけないことが多くあることを感じました。

3週目は馬について学びました。北海道大学では馬の実習はほとんどないので、ここで実習をすることができてとても良かったです。バンコクの乗馬クラブでは跛行診断や神経ブロック検査の方法について学び、カンペンセンでは蹄病の画像診断や外科処置について学ぶことができました。馬の外科の先生は、病気になった動物を健康な状態に戻すだけではなく、健康な状態の動物を維持することも獣医師の責任であることを強調していました。病院の中に行くと、病気を治すという点に偏りがちですが、そうした視点の広さに気付かされました。

4、5週目は反芻動物の実習でした。身体検査やエコー検査、採血や注射など多くの手技を体験させてもらうことが

でき、よい訓練になりました。大動物の経験がほとんどなかったのですが、診察と先生のわかりやすく詳細な説明のおか



羊からの採血実習

げで、疾患の病態生理まで理解することができました。子牛の下痢症例についてのプレゼンテーションを行いました。かなり調べて準備したので、質問にもしっかりと答えることができ、担当の先生にも内容を褒めていただきとても嬉しかったです。

6週目はエキゾチックアニマルについて学びました。日本ではほとんど扱わない猛禽類やヘビ、オウムなどの診察や手技を学びました。このUnitでもたくさんの手技を経験させていただき、とてもありがたかったです。それぞれの動物についての画像診断を学ぶことができ、非常に興味深く感じました。個人的に感じたカセサート大学と北海道大学の違いは大きく3つありました。

1つ目はたくさん動物種の実習があることです。カセサート大学では、6年生が1年間クリニカルローテーションをするのですが、卒業後の進路に関係なくすべての動物について実習を行うことになっていました。今回は、タイの学生に混ざりながら魚やエビなどの水生動物、猛禽類やウサギなどのエキゾチック、馬など、北海道大学のカリキュラム上は体験できない実習に参加することができました。

2つ目は専門用語を英語で学ぶ点です。ローテーションでは、すべての先生から症状や病態などについて英語で詳しく説明を受けることができました。個人的には、タイの学生や研修医の先生に比べて単語力が低いことを痛感し、もっと勉強しなければいけないという危機感、モチベーションにつながりました。

3つ目は頻繁に行われるプレゼンテーションです。実習とプレゼンテーションは基本的にセットになっていました。カセサート大学の学生はプレゼンテーションをする機会が非常に多く、伝える力、話すかに優れていました。こうした能力は獣医師にとって必須だと思います。また、発表時の質問によってわかっていなかった部分を明確にでき、さらに深い理解が得られる点も長所だと思います。私自身、プレゼンテーションの準備を通してより深い知識を得ることができ、また発表の場での質問やディ

スカッションにより、新しい視点に気づくことができたと感じました。

本プログラムは他のプログラムに比べると派遣期間が長いので、たくさん授業や実習を受けられることに加えて、タイの学生とも交流することができました。一緒に実習を受けたり、スポーツをしたり、ご飯を食べに行ったりして、いろいろなことを話すことができ、とても楽しかったです。

最後に、本留学プログラムの開催に向けてご尽力くださった片桐先生、Aksorn 先生をはじめとする先生方、IVEP の方々、カセサート大学のスタッフの方々に感謝申し上げます。また現地での生活を支えてくれた学生たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



タイの学生と訪れたワット